

※問いに字数制限がある場合は、句読点等をふくみます。

□ 線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- ① ピアノをエンソウする。
- ② 体育でテツボウを練習する。
- ③ 税金をオサめる。
- ④ 限りあるシゲンを大切にす。
- ⑤ 書物を著す。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(出題の都合上、文章等の一部変えています。)

僕はいま、大学でジャーナリズムやメディア・リテラシーを教えている。そのうちの一つの授業は大教室だ。学生の数も多い。たぶん300人以上いる。

教壇の上から一方的に授業を進めるだけでは面白くない。(1) 授業の最初の30分は学生たちにハンドマイクを手渡しして、この一週間のあいだにメディアに対して自分が抱いた①違和感を、一人ずつ発表させることにしている。

この場合の違和感をもう少し詳しく説明すれば、メディア(テレビでも新聞でも本でもネットでも)に触れながら、この伝えかたは何か変だなどか腑に落ちないなどと思ったこと。これを毎週やる。いろいろな面白い意見が出る。

「先週、テレビのバラエティ番組の公開収録に参加したのですが、オンエアを見たら雰囲気(ふんいき)がぜんぜん違うのでびっくりしました」

「どうして事件が起きると、被害者の評判は『挨拶をちゃんとする良い子でした』とか『とても真面目で残念です』ばかりになるのでしょうか。たまには『素行が悪いのでいつかはこんなことになるのではないか』と書いていました」みたいなコメントがあってもいいと思うのですが」

「24時間テレビって変です。寄付をするのならタレントもノーギャラでやるべきです」

「どうして事件を起こした少年は顔写真や名前が出ないのに、被害者の側は少年でも名前や顔が出るのですか」

「犯人が捕まったときに手錠などにモザイクをつける理由がわかりません」

「半年くらい前に中国に旅行したとき、親から携帯に電話がかかってきて、反日デモがすごいからすぐ帰ってきなさいと言われてました。でも中国ではまったく反日デモなんて目にすることはありませんでした。会った中国人たちはみんな、日本人と知りながら、とても優しく接してくれました。これはいつたいどういうことでしょうか」

学生たちはこんな疑問や違和感を口にする。僕が答えられる場合には答えるし、これはみんなで意見を出し合ったほうがいいなと思うときには論議させる。

本当なら、具体例を挙げた質問や違和感すべてへの答えを書きたいけれど、それではきりが無い。ここでは最後の質問について、考えてみよう。

彼が中国に旅行していたとき、両親は家でテレビのニュースを見たらしい。鉢巻をして大勢で反日の*シユプレヒコールをあげながら通りを歩く中国人たち。広場では*日章旗に火をつける人もいた。確かにこんな映像を見たら、うちの子は大丈夫かしら、と思いたくなるだろう。

でも実際には、反日デモをやっている中国人はほんの一部だ。(2) 日本のテレビ・ニュースを見ると、まるで中国全土で反日デモが吹き荒れているような気分になってしまう。

学生がこの違和感を口にしたとき、やっぱりその時期に中国にいたという別の学生も手を挙げた。彼はたまたま反日デモの現場に遭遇したという。

「通りを20人くらいの男たちが大声をあげながら行進していました。多くの中国人たちはその様子を歩道から眺めていました。バカなことをしていると顔をしかめている人もたくさんいました。たくさんの方が映像を撮っていました。日本のテレビ局の撮影クルーもいました。日本に帰ってきてから、YouTubeでそのときのニュース映像を見ることができました。でも雰囲気は、実際にその場にいた自分が感じた雰囲気とはまったく違います」

彼のこの言葉を、わかりやすくイラストで説明しよう。日本のテレビ・ニュースの画面では、多くの男たちが怒っている。これだけを見れば、確かに中国全土で多くの人たちが怒っているかのような印象を受ける。

でもこのときに映像をもっと広角で撮って周囲の様子を入れていたら、印象はまったく違うものになっていたはずだ。これが③フレーミング。映像は現実の一部を切り取ることしかできない。もちろん常に広角で撮っていれば、もっと周囲の状況はわかってくるけれど、今度は人の表情などの細かなニュアンスがわからなくなるし、何よりもインパクトが薄くなる。しかも最近はテレビのニュースだけではなく、よりアップで撮る携帯電話やスマホの映像を、ネットで見るのが普通になってきた。特に戦場や紛争地域など危険な場所ほど、携帯やスマホの映像の割合が大きくなる。つまりフレーミングがより狭くなっている。この流れはもう止められない。

ならば④観る僕たちはどうすればいいか。

いま見ている映像は現実の一部でしかない。その思いを常に意識の底に置くことだ。僕は実はホラー映画が苦手だ。要す

るに臆病おびょうなのだ。だからホラー映画を見るときは、「これはフレームなのだ。全部じゃない。カメラが違う角度を撮れば、照明さんや音声さんや監督じやくんくなどのスタッフたちが映り込むはずだ」と必死に自分に言い聞かせながら映像を見つめている（でもやっぱり怖いけれど）。

まあこれは極端きくたんな例。あまりそんなことばかり考えていたら映画を楽しめなくなる。でも映像（特に報道系）に接するとき、「これはフレームで切り取られた現実なのだ」との意識を常に持つことは、リテラシーとしては重要だ。

『たったひとつの「真実」なんてない』（森 達也）より

（注）

* シュプレヒコール デモや集会などで、スローガンなどを一斉いっせいに叫ぶこと。

* 日章旗 日本の国旗である日の丸の旗。

問一 (1) (2) に当てはまることばとして最も適切なものを次のア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア なげなら イ ところが ウ だから エ また

問二 — 線部①「違和感いわかん」とありますが、どういうことですか。三十五字以上、四十五字以内で説明しなさい。

問三 — 線部②「彼のこの言葉を、わかりやすくイラストで説明しよう」とありますが、彼が見たニュース映像のイラストとして最も適切なものを次のア～ウから一つ選び、記号で答えなさい。



問四 — 線部③「フレーミング」とありますが、「フレーミング」の長所と短所について述べた次の文の（あ）（い）に当てはまる言葉を本文よりそれぞれ五字以上、十字以内でぬき出して答えなさい。

長所…（あ）がわかる。 短所…（い）がわからない。

問五 — 線部④「観る僕たちはどうすればいいか」とありますが、これについて後の問いに答えなさい。

（1） 筆者は、映像を観るときにどのようなことが大切だと述べていますか。三十字以上、四十字以内で書きなさい。

（2） 映像を観ることについて、筆者の考え方として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 海水浴をしているリゾート地の人々の映像を観て、自分もリゾート地に行ってみたいと思う。
- イ 学校に行けずに働いているスラム街の子どもの映像を観て、スラム街の子どもたちはかわいそうだと思う。
- ウ けんかをしている繁華街はんかがいの酔っばらよっぱらいの映像を観て、その繁華街は治安が悪い危ない場所だと思う。
- エ マナーの悪い外国人観光客の映像を観て、すべての外国人観光客のマナーが悪いわけではないと思う。

問六 〰〰線部の学生の疑問について、安子さんと梅子さんが次のような会話をしています。この会話文を読んで後の問いに答えなさい。

安子…この学生さんが言っているように、テレビのニュースで事件の被害者の知人が、被害者のことを悪く言っているのを見ることはほとんどないわね。どうしてかしら。

梅子…それには二つの場合が考えられるわ。一つは本当に被害者に悪い評判が全くないという場合ね。とてもいい人が事件に巻き込まれて被害を受けてしまうようなニュースを見ると、二度とこのような事件は起きてほしくないと思うし、とても悲しくなるわ。

安子…もう一つは何かしら。

梅子…もう一つは、事件の取材で被害者に悪い評判が見つかったとしても、そのことはあえて伝えず、被害者の良い評判だけを伝えているということが考えられるわ。

安子…どうして被害者の悪い評判をニュースで伝えないのかしら。

梅子…それはニュースをより（A）的なものにするためだと思うわ。「素行が悪いのでいつかはこんなことになるのではないか」と思っていました」という言葉どおり、評判の悪い人がそのせいで事件に巻き込まれてしまうことはある程度予想がつくけれど、評判の良い人が事件に巻き込まれてしまうことはニュースの視聴者にとって予想外のことですね。

安子…なるほど。（A）的なニュースは大きな注目を集めるから、それを伝えるニュース番組は高い（B）率が取れる。そのために、取材して分かった内容の一部しか伝えない場合があるのね。これもフレーミングの一種といえるかもしれないわね。

梅子…そうね、決してウソを伝えているわけではないのだけれど、事実の一部しか伝えていないことがあるということは知っておく必要があるそうね。

安子…それにしても（B）率を上げるためにそんなことをしているなんて、私たち視聴者からするとだまされているようにいい気分がしないわ。

梅子…でも、（A）的なニュースを伝えると高い（B）率が取れるのはなぜかしら。それは（C）からではないかしら。ニュース番組の制作者はそのような視聴者の願望に応えようとして、そのようなことをしているともいえるのではないかしら。

安子…たしかにそうね。私たち視聴者はテレビをはじめとするメディアから情報を受け取るのだけれども、メディアの情報に対して大きな影響力を持っているのも私たち視聴者なのね。

(1) (A) にあてはまる言葉として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 具体 イ 決定 ウ 刺激 エ 発展

(2) (B) にあてはまる言葉を、会話文中から二字でぬき出して答えなさい。

(3) (C) にあてはまる内容を考えて、十五字以上、二十五字以内で書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

父の書齋しよさいの机ひきだしの抽出には時々珍めづらしい食べ物があった。父は朝六時半には起きて、朝食まで書齋に閉じこもって本を読んでいた。書齋に入って一時間すると母が珈琲コーヒーを入れて行く。そんな時父はそれを母と二人だけで食べるらしかった。それは*舶来はくらいのチョコレートだったり、チーズだったり、ビスケットだったりした。日曜日の朝など母は父に特にたのんで、父の書齋を退出する時、それらを少し分けてもらって来て、私たちにお裾分けすそわけしてくれることがあった。するとそれらは私たちに、世の中にこんなにおいしいものはないと思われような味がするのだった。

父の書齋に入ることは厳重に禁じられているにも拘わらず、私たちは時々父の書齋に忍しのび込み、父の書齋を「(1)」した。そんな時はかならず書齋の机の抽出を開け、どんなおいしいものが蔵しまわれているかを確かめたが、それを食べる勇氣はなかなか出なかった。

父の書齋に忍び込んだ時、私はかならず、いつも父の大きな机の右の隅すみに置かれている*ウェブスターの辞書をそつと拵ひらげて、*グラビアの図版を眺ながめて楽しんだ。その辞書を私は本の「(2)」と呼んでいた。そんな大きい厚い本を持っている人は、どこを捜さがしてもいないのだ、父だけがそんなすばらしい本を持っているのだ、そして父だけがこの本に書かれてあることを全部知っているのだ、と私は信じていた。

図版の大部分は目の覚めるように美しい天然色の写真だった。各国の旗、勳章くんしょう、銃器じゆうき、飛行機や自動車の歴史的変遷へんせん、鳥、魚、蝶ちょう、花、貨幣かへい、——私の目を楽しませてくれる図版の種類をその辞書は無む限げんに蔵ぞうしているように思われた。

しかしある時私は図版を見て楽しむほかに、この辞書の重大な利用価値を発見した。①この辞書に花びらをはさんだらすばらしい押花おしはなができるだろうと思いついたのである。治郎兄じろうさんが夏休みの宿題に押花をしたのを見てから、私は押花の美に目覚めていた。そして真似まねをして自分でも試みたが、私の持つている絵本の類では幾冊重ねても重しの効果が上らないので、兄が作ったような綺麗な押花ができたためしなかったたのである。

私は早速その思いつきを実行に移すことに決め、庭へ行って花びらの種類をできるだけたくさん集めて来た。そしてそれらをウェブスターの辞書の中に種類ごとに分けて挟はさんだ。——十日位私はそのことを忘れていた。②思い出した時私の胸はたちまち期待にふくらんだ。今度こそ押花の成功疑いなしと思えたからである。私はそつと父の書齋に忍び込み、ウェブスターの辞書を拵ひらげ、花びらを挟んだ頁へいを捜したが、それは意外にも大変な仕事だった。しかし漸ようく真紅まへいの薔薇ばらの花びらを数枚挟んだ頁を見つけた時、私は思いもかけなかった失敗を発見し、恐ろしさに一瞬いつしゆん目の前が暗くなってしまう程だった。——花びらの色が花びらの形そのままに頁にくつきりと映うつってしまっていたのである。

押花は「(a)」なくよくできていた。その点で私の見込みに狂くるいはなかった。しかしこのくつきりといった染しみを父が見つけたら——父が大切にし、自慢じまんにしているこの辞書に、私がそんな傷をつけてしまったことが発覚したらどうしよう。私はほかの花びらが挟はさまれている頁を捜した。しかし花びらを挟んだ頁はどの頁も無事ではなかった。ただ一番くつきりと色がついてしまったのは真紅の薔薇の花びらを挟んだ頁だった。ゴム消しで消したら消えないだろうか、という考えが浮かんで来た。私はその考えに飛びついて、机の上のペン皿にあるゴム消しで消してみたが、色は一向に落ちなかった。そればかりかゴム消しで強く消し過ぎたために紙が少し破れてしまった。ああどうしよう、と私は思った。私は絶望的な気持で辞書を閉じ、ゴム消しの屑くずを吹ふいて、痕跡こんせきを留とどめないように注意したのち、回収した花びらを掌てのひらに載のせて、父の書齋をそつと出た。今となってみると、その花びらが憎にくらしかった。捨ててしまいたい程だったが、それも惜おしく、私はそれを目に「(b)」とところから遠ざけたいばかりに、私が一番読みそうにもない絵本の中に挟はさんだ。

それから私は*善後策をゆつくり考えることにした。今夜にも父に告白して父に赦ゆるしを乞こおうかという考えがまず浮かんだ。しかし父の書齋には絶対に入つてはいけないことになっているのではないか。その禁をすでに犯おかした上に、更に私は父があんなに大切にしている辞書を台なしにしてしまったのではないか。父はどんなに怒るか知れない。そう思うと私にはその考えを実行に移す勇氣は到底とうていそうにもなかった。もしかすると父に分わからないで済すむかも知れない、という考えがその次に浮かんで来た。私が捜さがそうと思つても花びらを挟んだ頁はなかなか容易に捜せなかったのだから、ひよつとすると父がその頁を開くことはしないかも知れない。もしあつたとしても、ずいぶんあとのことかも知れない。そうすればそんなに叱しかられないで済すむかも知れない。そう思うと私は救われたような気持となった……

それからしばらく私は父の書齋から遠ざかっていたが、ある日再び父の書齋に忍び込んだ。いつものようにウェブスターの辞書を開いて図版のいくつかを見て楽しんだのち、花びらの染みのついた頁を一頁、苦心して捜し出したが、染みの色は期待に反して一向に褪あせていかなかった。

ふと私は父の書齋机に、蔵うのを忘れたのかチーズが蓋ふたを開けたまま、ナイフと共に置かれているのを発見した。私はチーズが大好きだった。おやつにチーズを挟んだパンを食べることはよくあつたが、父のチーズはそれとは比べものにならないようにおいしい気がした。薄うすく切きってひとときれ食べても分りはしないだろう、という考えが頭に浮かんだ。盗みぐいは罪悪の一つだという考えがすぐ続けて浮かんだが、一回位はいいだろうという考えがその考えを打ちまかした。

私はすでに四分の一位減っているチーズにナイフをあてた。しかし下まで届かないうちにナイフはチーズの薄片はくせんをそいでしまつていた。当然の結果としてチーズの切口は凹凸こぼこになつてしまつた。余り薄く切ろうとしたからそうなつたのだ。今度は思い切つて厚く切ることにした。切り落してみると、チーズの減り方はかなり目立つた。私はこんな大それたことを思いついたのをはげしく後悔こうかいした。

しかしチーズはおいしかった。それは後悔の念を雲散霧消うんさんむしよさせる程ほどであつた。

次の日幼稚園から帰つて来た私は、おやつを食べたのち、また父の書齋に忍び込んだ。今度は机の上にチーズはなかつ

た。机の抽出を開けてみるとちゃんとあった。昨日私が最後に見届けたのよりもかなり減っている。あれから父はきつとまたチーズを切って食べたのだろう。しかしその時私が食べたために減っているのは気づかなかつたに違いない。私は安心してひととき切って食べることにした。しかしどうしてもあとを引く。私は思い切ってもうひととき切って食べた。二日おいて私が父の書齋に忍び込んだ時は、チーズはもう半分以下に減っていた。私が二日前に食べたことは見つからないで済んだのだ。なぜなら父がナイフを入れる時に、前回ナイフを入れた時よりも減っていることに気づけば、当然私たち兄弟のうちの誰かの仕業だということが分る筈だったからである。③私は安心してひととき切って食べた。しかしどうしてもあとを引く。私は思い切ってもうひととき切って食べた。

それから二三日経ってまた父の書齋に忍び込んだ時、チーズはもう四分の一位に減っていた。今度は用心して、あとを引くのをこらえ、私は薄いひとときで我慢した。

ある日曜日の朝、父は一勉強したのち母と珈琲を飲みながらふとチーズを蔵い忘れていたことを思い出した。十日程前にナイフを入れて以来忘れていたのである。机の抽出を開けて、チーズの箱の蓋を取ってみて、彼は自分の目を疑う。母とひとときれずつ切って食べたきりだった筈のチーズが、もうほとんどないのだ。「お前、料理にでも使ったのか」と父がいう。「いいえ」と母は答える。「子供たちだな」と父は気づく。

「そうかも知れせんわ」と母はいう。「みんなをここへ呼び寄せなさい」と父は母に命令する。——そんなわけで、その朝私たち兄弟に時ならぬ召集がかかった。

「正直にいいなさい」と父は三人を並ばせて怖い顔をした。

「お前たちのうちの誰か、お父さんの留守中に書齋に入って、お父さんが机の抽出に蔵っておいたチーズを食べたろう」

みんな黙っていた。

「虎雄、食べたか」と父はいった。

「はい」と虎雄兄さんは小さな声で承認してうつむいた。

「治郎はどうだ」

「はい、少し食べました」と治郎兄さんはわざと畏ったような態度でいった。

「少しってどの位だ」

「一日おきにひととき位です」

「虎雄はどうなんだ」

「僕も同じ位です」

「二人でやったのか」

「いいえ」と治郎兄さんがいった。

「いいえ」と虎雄兄さんもいった。

「潔、お前は食べなかつたらうな」と父は私に向かっていった。

「いいえ、食べました」と私はいった。

「どの位だ」

「二日おきに二きれ位です」と私はできるだけ真実を告白しようとしていった。

母がふき出したのをこらえているのが分った。

父は怒るのを諦めたようだった。そして怒る代りに、もう僅かしか残っていないチーズを三等分してひとときれずつみんなに与え、今後無断で絶対に書齋に入らないことを私たち一人一人に誓わせると、私たちを放免した。

『幼年時代』(柏原兵三)より

(注)

* 舶来 外国から船で運ばれて渡来するということ。

* ウエブスター 十九世紀初頭にノア・ウエブスターが編纂した名高い辞典。

* グラビア うつくしく印刷された写真などのページ。

* 善後策 うまく跡始末をつけるための方策。

問一 (a) (b) に当てはまるものとして最も適切なものを次のア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

(a) ア 関係 イ 理由 ウ 申し分 エ 言い訳

(b) ア 余る イ 触れる ウ 浮かぶ エ 染みる

問二 〓線部c。「雲散霧消」のこの場合の意味として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一層際立たせる イ 完全に無くす ウ かなり無くなる エ 少し思い出させる

問三 (1) (2) に入るのに最も適切なものを次のア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- (1) ア 散歩 イ 探検 ウ 侵略 エ 回遊
(2) ア 王様 イ 名人 ウ 老人 エ 社長

問四 〓線部①「この辞書に花びらをはさんだらすばらしい押花ができるだろうと思いついたのである。」とありますが、なぜこのように考えたのですか。二十五字以上、三十字以内で説明しなさい。

問五 次の図は 〓線部②「思い出した時私の胸はたちまち期待にふくらんだ。今度こそ押花の成功疑いなしと思えたからである。」から後の「私」の心情の変化を整理したものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

(A)
←
消すを試みるがむしろ状態は悪くなって絶望的な気持ちになった。
←
押花はかえって (B) ものとなったが、捨ててしまうこともできなくて書齋を出て絵本に挟んだ。
←
(C)
←
父が汚したページを見つけられないかもしれないと自分に言い聞かせようやく気持ちが落ち着いていた。

(1) (A) に当てはまるものとして最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 押花は確かに思った通りにできていたが、花びらの色が辞書に移っていることを見つけて叱られるのが心配になっている。
イ 部屋に入る前から押花の色が辞書についていると予想していたから、そのことが頭にあって押花は目に入らなかった。
ウ 押花がとてよくできていたことはうれしかったが、大事な辞書を汚してしまって父親への申し訳なきに心が痛んでい
る。
エ つくったときからずっと期待していた押花はよくできていたが、辞書に花びらの色をつけたと知り恐ろしくなっている。
(2) (B) に入る適切な言葉を五字以内で答えなさい。
(3) (C) に入るのに最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 父親がどんなに怒るか知れなかったので、正直に話すことは全く考えられず心の中でぐるぐる回っている。
イ 入ってはいけない書齋に入った上に大切な辞書を汚してしまった罪の意識ばかりで、他はなにも浮かばない。
ウ 書齋の辞書を汚したことを正直に話そうかと考えたが、父にひどく叱られるかと思うとそれはできない。
エ 自分がしてしまった悪いことを正直に話そうかと考えるが、自分に自信が無かったので思い切ることができない。

問六 〓線部③「私は安心してひとときれ切って食べた。」とありますが、なぜ「私」はそうしたのですか。次の一文はその説明です。空らん (D) (E) に入る適当な言葉を本文の言葉を使い、() 内の字数指示に従って答えなさい。

チーズが (D 五字) のに (E 十字以内) ので、父親は私がチーズを食べたことに気づいていないのだと思
ったから。

問七 次の文章はこの作品を読んだ二人の中学生が話をしているものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

安子…この小説は「私」の目から回想された小説なんだよね。でも、これいつ頃の作品なのかしら。

梅子…あ、一九六〇年代なんだって。昭和の作品なのね。この頃って一家の中でお父さんが強かった時代だったのよね。

安子…「舶来はくらいの」という言葉も時代を感じさせるわね。外国産であることが貴重で高価な物の代名詞になっていったんだって。令和や平成とはだいぶ違う。

梅子…「父」は、子どもたちもこの「舶来はくらいの物」を味わっているのを知ってる。そういうのもあって子どもたちに書齋しよさいに出入りするのを禁止したのかもね。ちょっとけちだわ。

安子…でも「私」はこの世の物とは思えない味にひかれて書齋しよさいに出入りする。ただ一方でお父さんのことを本当に尊敬してて疑っていないのよね。純真、素直だわ。

梅子…だからお父さんの大事にしている辞書を汚こしてあんなにあわてたのよね。でも、本当のお父さんはおいしい物がなくなるのがいやで子どもたちに分け与あたえない。面白おもしろいわ。「私」の父のイメージと本当の「父」に落差があるのね。あ、そう思うと「ある日曜の朝」の「父」の慌あわてようが分かるわ。「 F 」という部分の驚おどろきは、あるはずの物がないうというだけでなく、大好きな物がないという気持ちも含まくれているのよね。

安子…なるほど。「父」ってちょっとかわいいね。でもこの時「私」は全くそう思っていない。だから「父」に聞いただされたときに「 G 」としたんだね。この落差が面白い。このお話は回想の物語。きっと大人になった「私」はその頃の自分を愛いとしく振り返かえっているんでしょね。ひよっとしたら「父」のことも「今ならわかるよ」と思っているかも知れない。

梅子…そうか、今の「私」はそう思っているかも知れないわね。なるほど、人は成長するのよねえ。あらら、でもこの時からこの「落差の面白さ」が分かっている人物が一人いるわね。

安子…あ、「母」ね。だから「 H 」と書かれているんだわ。思えば最初の場面から、「母」は全部お見通しだったのかも知れないわね

梅子…やはり「母は強し」なのね。

(1) (F) にあてはまる言葉を本文より十字以内でぬき出して答えなさい。

(2) (G) にあてはまる言葉を本文より十五字以内でぬき出して答えなさい。

(3) (H) にあてはまる一文を本文よりぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問八 この作品の表現の説明として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 登場人物の心情をそれぞれの見方から描えがくことで温かみのある雰囲気を出している。

イ 主人公の気持ちが高まる場面では短い文を重ねることで心中をおおらかに描えがき出だしている。
揺れ動く主人公の心情を倒置法とうちほうの多用により読者が親近感を持てるように書かれている。

エ 人物がたくさんいる場面では説明を減らして台詞せりふを重ねることで臨場感を生み出している。

